

第
12
回

九州環境 市民フォーラム in かごしま

テーマ
「協働」

【報告書】

平成28年

1

23

土 12:30~18:00

12:30 ~ 受付
13:00 ~ 開会式
13:20 ~ 特別講演 木村秋則氏
14:25 ~ 全体写真
14:45 ~ 活動発表
16:00 ~ 分科会
18:00 ~ 終了

24

日 13:30~10:40

(暴風雪)
9:30 ~ インフォメーション
9:40 ~ 全体共有とWS
10:20 ~ 閉会式・写真など
10:40 ~ 解散



主催：特定非営利活動法人九州環境サポートセンター
一般財団法人セブン・イレブン記念財団
公益財団法人かごしま環境未来財団

特別講演



【木村 秋則 氏】（「奇跡のリンゴ」の無農薬・無施肥のりんご栽培に成功した日本農家）
「いのち」の原動力は食である。食は、自然の調和で生産することが大切であり、食は太陽と水と土と愛情で生まれます。これまでの農業は多くの肥料を使ってきました。肥料で使った窒素は、ガス化して温暖化の要因になり、地下水に流れ込み汚染を繰り返してきました。野菜の栄養価も1951年と2000年を比較すると、ほうれん草やにんじん、トマト、みかんなど栄養価が著しく低下しています。私は、これは、根っこに問題があるのではないかと考えています。また、稲の根にすむ微生物群の変化も起こっており、肥料を施肥した稲の方が、微生物群がいなくなっています。

無施肥は土を活かし、作物を生かし、根を活かします。病害虫の発生もほとんど見られないのです。雑草は土を作ります！雑草を生かす農業をすると、除草作業という重労働から開放されるし、農薬や施肥も必要としません。食の安全と環境改善のためにも、雑草を生かす農業をお勧めします。自然栽培は全国に広がっています。個人農家からNPOやJAなども取り入れており、就労支援施設などへも2020年のパラリンピックへ向けて農水省や厚労省が支援しています

あなたなら、現代の農業と自然栽培のどちらを次世代に伝えますか！？

あなたから、今から、農業ルネッサンスを進めましょう！

トキが44年ぶりに戻りました。実は、自然栽培実施の3年目の水田に舞い降りたのです。奇跡が起きたのです。自然の生き物は地球環境修復を敏感に感じ取っています。奇跡は身近な場所でも感じ取れます。植物はやさしさを求めています！植物は不思議です。優しい人の指にはキュウリの弦が指に絡まってきます。植物は感動を与えている存在です。

最後に、農産物は生産者の努力の結晶です。「いのち」を作る「食」の消費にご協力ください。

協働事例発表



NPO 法人かごしま市民環境会議《鹿児島県》

代表 村山雅子氏

鹿児島市の環境基本計画策定に参加した、市民、団体、事業者、行政の有志で集まり、持続可能な社会作りのために行動することを目的に設立。様々な協働の事業を毎年実施。方向性が一緒で、無理して協働しないことがモチベーション維持のために必要で、お互いの信頼関係を築くことが重要です。



NPO 法人環境カウンセリング協会長崎《長崎県》

浅田要一郎氏

長崎は、海岸線が長く、漂着ごみの回収は困難です。発泡スチロール、18Lのポリタンなど様々漂着し、重機を入れないと処理できないほどの規模です。

昔はごみ拾いから処理まで自分たちでしていたが、現在は行政の協働に発展しています。

行政と協働するには早めの打診と、共通認識を作り上げる事。地元とやっていくには、それだけではなくプラスアルファとして広がりや発展性を視野に活動を進めるべきです。



NPO 法人桜島ミュージアム《鹿児島県》

理事長 福島大輔氏

桜島全体を丸ごと博物館と考え、現地で本物を見て、体感し、楽しみながら学べる地域づくりを実践。ビジターセンターの管理・運営の委託、体験型観光の総合コーディネートをしており、修学旅行や地域エコツアーなどを経て、第9回エコツーリズム大賞の優秀賞受賞。椿油の商品化による6次産業化や総合学習支援。ジオパークという大地の資源を活用したまちづくり、市民も企業も行政も協働でまちづくりを進めています。



NPO 法人かいろう基山《佐賀県》

事務局長 松原幸孝氏

かいろうとは「快老」からスタート、皆勤、快朗などの意味をもつ平均年齢70歳以上シニアのボランティアの会。現在労働力提供23名程度、毎日10～12名以上が参加、年間235日ボランティア活動。

森林を荒らしている竹を伐採し森を健全化と共に、竹の資源化に取り組んでいる。

森林整備活動、市民力の養成、竹の資源化、地域通過の創出などの地域おこしの仕組みを構想し、活動。森をきれいにした廃竹は、チップやパウダー、炭などにし、農家や市民に活用していただいている。



公益財団法人かごしま環境未来財団《鹿児島県》

事業課長 塩川哲郎氏

市民および事業者が環境について感心や理解を深め、日常生活や事業活動において自発的に環境保全活動を実践すると共に、その活動の輪を広げていくことを促進。

地域まるごと共育講座では、NPOなどと協働で年間30講座程度実施。年間協力いただいた団体には、3万円の活動支援金や貸し切りバスの支援なども行っている。

市民を舞台に上げることが未来館の発展に繋がるかと様々なつながりを活かして活動を広げている。さらに企業等の協働を加速させることにより、NPO等の活動の支援にも繋がるかと考えている。

分科会

※2日目の天候が暴風雪のため、「安全確保の上各自の判断において参加」といたしました。
2日目はプログラム変更および切り上げ開催としております。

第1分科会 協働で進める 環境教育



環境教育の現場事例を「もりはやし倶楽部」の木之下さんにお話いただいた。活動紹介と共に、ヒト・モノ・カネなどの課題が提示された他、助成金とのつながりなど資金調達に対し法人化ができていないことが大きな課題であったが、かごしま環境未来館と連携や協働することにより、行政や企業の見方が変わり新たな連携を生み出したり、団体の強みをさらに周知するきっかけにもなった。中間支援との連携や協働が、課題解決や協働の増進に繋がっているという協働現場サイドの話題が提供された。

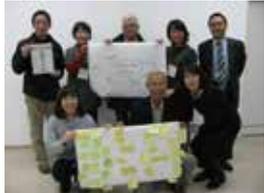
第1分科会の参加者は、環境への問題意識を持ち、実践「環境教育」をしている方が多く、プログラムを実施するうえで、資金・広報・フィール

ルドなど様々な課題が提示された。フィールドでは、田んぼの外来種や施設の老朽化などの課題も出されていた。

「協働」というテーマ話題では、参加者の中には、自らを経験不足と捉え、協働することに躊躇している、という声も聞かれた。協働は「活かし合い、補い合える関係性」を作ることが重要で、そのためには各々が持つ強みや持ち味を認識することも必要である。また、それぞれの事情を相互理解しながら、協働の相手や学習者の立場に立ちつつ、自らのミッションに合致する協働を目指すことが重要であると感じた。

まだまだ協働も進んでいないし、アプローチ先も手探りである。しかし、中間支援と繋がることにより「協働や連携」が広がり、活動促進への必要な仕組みでもあるのではないかと感想をいただいた。

第2分科会 協働で進める 温暖化対策



鹿児島市の環境政策課より、レンタサイクルシステム「かごりん」の取組について事例を紹介。市内21か所に設置されたサイクルボードで、スマートフォンやICカードをうまく使って、いつでも、どこでも借りられる・返せる仕組み。環境負荷の少ない自転車の利用を増やすため、市長の声により環境政策課が担当しているところが興味深い。今後、公共交通（バスや電車）・観光やまちづくりと連携して活用を広げていく予定。今後の展開に注目していきたい。

その後の質疑応答から、事業が進みやすい仕組みへの提案やトップの判断も大きい、その働きかけも重要であるという話になった。

参加者は、市民・環境活動団体（NPO）・自治会代表・企業・行政など様々な立場の方が参加。それぞれ持つ課題や悩みや共通する課題など出し合い、意見を出し合った。

課題①主体的住民参加

行政—市民になかなか身近なものと感じてもらえない悩みを伝えると、市民から「いやいや、それは行政だけがすることではないよ、それは逆にこれからは住民の方から取り組んだり提案したりすることだ。」という提案や、市民団体からは、「すでにこんな取り組みをしているから、行政としてはこんな手助けをしてほしい。」という提案型で進めて行っている事例などを聞き、「もっと積極的に行政や企業にも出かけて行って、人間関係を作ることや前向きな提案を日頃から行っていくこと」このような関係がお互いに情報交換や協働を行うことにつながり、地域の課題や・環境問題解決の原点になるのではないかと結論に至った。

課題②問題の見える化

ごみ減量やイベントなどでのCO2の増加減少をわかりやすく伝える工夫なども必要である。具体的に「住民には例えばごみ処理にはこれぐらいの税金を使っている。みんなで減らせば、このぐらい税金の無駄遣いが減る、省エネをすれば、このぐらい家計が助かるなど、数字で知らせることも大事」「自治会のごみ処理はいくらかかっている」という数値を見える化し、住民に伝えることにより積極的に取り組んだ事例も出された。

課題③もっと楽しく多くの人が参加できるイベントを入り口に市民（家庭・学校・学生・・・）が、参加の入り口として、アートなど気軽に参加でき、楽しく取り組めるイベントの工夫が必要であり、まず多くの人に参加してもらう仕掛けづくりが必要。参加することで環境問題に関心を持ってもらうことができる。

課題④ネットワークの構築の重要性

かごしま環境未来館を中心として、自然に連携している鹿児島市の事例から、個別に活動していても限界があり、問題解決のためには、互いの特性や専門性活かしつつ、多様なつながりが必要、過不足のところを補い合い、顔を突き合わせて行う活動が力になっていくことを確認した。

地球温暖化は即効果は表れないが、「できることから自分たちで、楽しく取り組んでいく」ことが、温暖化対策の一番重要な取り組みであり近道ではないかと感じた。

第3分科会 協働で進める 森林の保全



第3分科会では、参加いただいたみなさんと課題についてブレインストーミングを行い、人・情報・かかわり方・価値に分類した。これを「協働」という軸で分析した。今回は、1日目のみであったため「人・情報」について分析した。

国の政策や活動中の問題点など議論もできたが、特に「参加者が少ない」という課題が多かった。

森の価値が72兆円、森の大きな恩恵、奥山は整備されているが身近な里山の整備への施策などが進んでいない、竹が森に侵入し荒廃を進めていることを私たち市民は知らないという情報の無さ、共有の不徹底などが課題であることも共通認識された。

森林を管理できる人材育成の団体はどこにあるかの情報や団体と団体をつなぐ機関が必要であること、作業協力をいただいた方へ温泉券（割引券など）を提供することにより、山管理団体と参加者だけのつながりだけでなく、温泉施設など地域企業や団体との協働も計れる協働のあり方も模索された。

健康づくり、人と知り合う、社会貢献、達成感を味わうなど、楽しみをプラスアルファしていくことにより、参加者や興味を持つ人が増えてくれるのではないかと意見が出された。

様々な議論の中、「情報の発信の重要性」が再度大切であると認識に至り、森林の保全や管理に対する意義を熱く語るヒトが非常に大切であること、それにより人々が集まってくれる。そのような広報官的人材育成も重要であることが述べられた。また、私たちの活動には、もっと年齢層（ターゲット）にあわせた情報発信の仕方を工夫する必要があるのではないかと提議され、協働のためには情報発信の仕方「広報」が重要であることを共通認識した。

第4分科会 協働で進める ごみ問題



甲突川の事例報告をいただきました。現在は市民・企業・NPO・行政など連携し協働しているが、初めは10人ぐらいからスタートした取り組みであった。ボランティア証明書を発行することや参加しやすくなる様々な工夫で年々膨れ上がり、今では河川にも入れないぐらいの250人以上の市民・企業が参加してもらっており、発表に対しボランティア証明や様々な工夫に参加者からの高い評価が集まっていた。事例発表者は逆に、参加者から、もっと就職活動も動き出している大学生なども取り込んだらどうか、動画をHPにアップしたらどうかとの意見もいただいたので、取り組めるところから実施していきたい。発表者としても実りの多い分科会だった。と事例発表を締めくくった。

協働とは何か？という問いに、みなで共通概念の統一を図ると、「共通の目的、メンバーは対等の関係でなくてはならない、みんながHappyにならないといけない！」「どっかが我慢しないといけない協働はいけない」と合意した。

課題としては、市民・企業・行政のそれぞれの持つ価値観の温度差を埋める必要がある。協働をする前に、協働をするための土俵作りや仕組みづくりが最も重要ではないかと結論に達した。

ネットワークを活かすには、それぞれの得意なチカラを持ち寄ればうまく機能し、未来作りへ一歩を進めるのではないかと。また、年の1回の集まりでは足りず、継続的に取り組んでいくことが重要である。さらに、まとめ役をする人がとてもキーポイントになると意見もあった。

第5分科会
協働で進める
食と農



手光えこびれっじ、NPO 法人循環生活研究所、海外、国内などの様々な事例や経験を紹介し共有した。また、参加者からも自己紹介などいただきキーワードを見つけていった。

その中でも、「子どもたちの未来に、何かできることを!」「コンポスト」「環境保全型農業」など、今、私たちがそれぞれ未来に向かってできることを共有していった。

現状の課題として、輸入、汚染、化学物質、ごみ、牛糞、土などに関する課題が上げられた。また、農業とは、1粒から2,400粒取れるという利回りはいいのに、儲からない農業になってしまっている事、安全な食が発信できていない事をどうすべきなのか。農業循環ノウハウを持つ人々が激減している事（高齢化、後継者不足）。農業の工場化による農業文化・食文化の偏りなどが論議された。

他にも、専業農家から兼業農家へ、兼業農家から企業やチャレンジ層へ、農業の担い手が移行することにより生まれる課題もあり、今後さらに新しい仕組みが求められているのではないかと現在の食と農の社会について振り返った。

新たな就農者からの話題から、新規就農しても地域の支援は無く、今後農家が儲かりながら生活していくためには発想の転換が必要である。また、コスト削減や消費者の価値観変換が必要であろうと議論された。

最後に、これからの農業は、機械のシェアと労働力の協働が必要ではなかろうかと議論された。

全体共有 WS のまとめ

各分科会の「協働」のキーワードを整理すると

- 共通の目的を持ち、対等で、みんな Happy!! の関係を構築することが重要!
- 協働するヒト・組織の価値観の統一が重要
- 顔を合わせる、思いをあわせることが Point!
- お互いの考え方や思いを知り、強みを活かす仕組みの場作りが必要!
- 情報の発信やコントロールが大切!

と整理され、ネットワークにより互いに思いを知り・理解することが、協働を促進する。

また、ネットワークを活かすことにより協働はさらに深まりさらに広がりを増す。

ネットワーク化と協働が、更に活躍の場を開拓・構築できたりするであろう。

また、それぞれの組織あり方や組織の考え方も、ネットワークにより、さらに高めあうことができるという意見に集約した。

最後に、今回のような顔を合わせる場を今後とも生み出し、顔の繋がったネットワークを構築していきましょうとまとめた。



ネットワークと協働で、未来を創造しよう!

ネットワークで繋がる!

顔を合わせてつながりを深く!

みんなでアクション!

1 会員になって
情報交流

2 Facebook
のグループページで
情報交換

3 九州各県で開催の
エコライフ・カフェ
に参加!

4 2016 九州環境市民フォーラム in 佐賀
に参加!
分科会でテーマとネットワークを深める!

5

九州一斉環境アクション
にエントリー!
九州のみんなと協働で取り組もう!



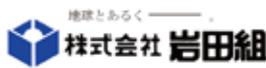
【事務局】
 NPO 法人九州環境サポートセンター
 〒860-0805
 熊本県熊本市中央区桜町 2-37
 錦桜町ビル 3 階 A 号室
 TEL:096-277-9660 FAX:096-277-9655
 info@q-support.org
 http://www.q-support.org/



下堂 蘭
 Shimodozono



税理士法人ひまわり FC
 〒891-0115 鹿児島市東開町 4-112
 TEL 099-263-5191 FAX 099-263-5192
 URL http://www.himawarific.com



有限会社 二幸食鳥
 〒892-0836 鹿児島市錦江町11-56
 TEL099-226-7095 FAX099-226-7216



「事業拡大のパートナー」
 税理士法人 さくら愛和パートナーズ
 〒891-0115 鹿児島市東開町3-170
 TEL 099-260-0100 FAX 099-260-0113
 URL http://tia.tknf.com